

尾崎一雄全集

第十二卷

筑摩書房

尾崎一雄全集第十二卷

昭和五十九年五月三十日初版第一刷發行

著 者 尾 崎 一 雄

發行者 布川角左衛門

發 行 所

筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一—一九一

電話 東京(291)七六五—(營業)

東京(294)六七二—(編集)

振替 東京 六一四—二三

印刷 株式會社精興社

製本 株式會社鈴木製本所

落丁・亂丁本はお取替致します

目次

ペンの散歩

ペンの散歩……………	五
俳句あれこれ……………	九〇
大岡昇平のあるとき……………	九七
牧野信一の墓、文學碑……………	九九
芥川龍之介を憶ふ……………	一〇四
圓地さんと私……………	一〇七
水原さんのこと……………	一一
大岡龍男さんのこと——富士正晴「虚子」に觸發されて——……………	一一四
「明治は遠く——」再説……………	一二三
わが庭の味の歳時記……………	一二七
明治の頃の風のうなり音……………	一二三
秋の蟲・秋草……………	一二六
梅 干……………	一二二
小田原一夜城址……………	一二四

富士を眺めつつ……………四

下會我だより

農藥空中撒布……………五

河野一郎七回忌……………五

梅の季節……………五

車内信號灯……………六

自分の本のこと……………六

老いゆく姿……………六

冬眠叶はず……………六

訃報相次ぐ……………七

無風記録……………八

記録更新中……………八

莓酒

草木茂る……………九

庭に來る鳥……………九

ウロのある玉樟	二六六
小鳥・猫・薔	二六八
莓酒	二七〇
握手とおじぎ	二七四
永井龍男句集『雲に鳥』を読む	二七六
夭折した友の本	二八一
歌集『水枕』	二八三
勁い人——瀧井孝作——	二八六
中野重治追想	二八八
雲に鳥	二九〇
鈴木信太郎さんとの御縁	二九二
戦友上林曉	二九四
上林曉追想	二九六
私の履歴書	二九八

『莓酒』以後

ハレー彗星	三三
それからそれへと	三九
思ひ込み・早とちり——藤枝靜男君のこと——	三四
核兵器——素人の心配	四九
春の氣配	五二
亥三代	五七
大岡昇平に關する雜談	六二
里見弴氏追想	六六
小林秀雄——志賀直哉をめぐる——	六九
閑中忙(一)	
謝辭で言ひ落したこと	七五
大ボケの記	七八
言ひ譯	八〇
再び言ひ譯	八二

越年の記 三六六

志賀康子夫人 三九一

訃報相次ぐ 三九三

要注意・徐行 三九八

新居に移る 四〇一

草木茂る 四〇五

立秋 四一〇

秋 冷 四一五

閑中忙(二)

百 舌 四二三

命の關 四二七

冬眠の季節だが―― 四二九

梅ほころぶ 四三四

啓 蟄 四三七

ボケの季節 四四二

心配御無用 四四六

から梅雨	四五一
ある基敵	四五五
二度の颱風で	四六三
新年早々	四六五
無事越年	四六七
啓蟄近し	四七〇
春寒	四七三
後記	四七九

尾崎一雄全集
第十二卷

ペンの散歩

ペンの散歩

君看雙眼色
不語似無愁

いろいろと片づかぬことがある。當り前の話で、片がつかぬからこそ人間、いや私は生きてゐるのである。

しかし、その片づかぬことを、少しでも減らさうといふ氣はある。自分にとつて大小輕重さまざまなその種のことを考へ廻してゐると、ウワツと叫んで飛び上りたくなつたり、冷汗がじわじわとにじんだりすることもあるが、そんなふうなものには觸らず、自他共に衛生無害なものだけを選んで、ぼつぼつと書きつけることにする。ペンの散歩と題した所以である。——散歩より漫步とした方が適當かも知れない。

大正六年（一九一七）といへば、その前年につづいて、私にとつては大變な年だつた。私にとつて大變だつたことはさて措いても、日本の文藝界として特記すべき年の部類に入るだらう。『新潮・日本文學小辭典』の年表をのぞいてみると、次のやうになつてゐる。

大正五年

福田正夫『農民の言葉』刊、中村憲吉『林泉集』刊、河東碧梧桐『碧梧桐句集』刊、森鷗外『高瀬舟』、同『澀江抽齋』、正宗白鳥『牛部屋の臭ひ』、夏目漱石『明暗』、永井荷風『腕くらべ』、宮本百合子『貧しき人々の群』、長與善郎『項羽と劉邦』、倉田百三『出家とその弟子』、内田魯庵『思ひ出す人々』刊、赤木桁平『遊蕩文學の撲滅』、廣津和郎『怒れるトルストイ』、上田敏歿、夏目漱石歿、『文章俱樂部』創刊、遊蕩文學撲滅論起る、『白樺』派の理想主義文學全盛。カフカ『變身』。

大正六年

萩原朔太郎『月に吠える』刊、日夏耿之介『轉身の頌』刊、志賀直哉『城の崎にて』、廣津和郎『神經病時代』、有島武郎『カインの末裔』、久保田万太郎『末枯』、志賀直哉『和解』、芥川龍之介『戯作三昧』、里見弴『妻を買ふ經驗』、菊池寛『父歸る』、田山花袋『東京の三十年』刊、河上肇『貧乏物語』、阿部次郎『美學』刊、有島武郎『惜みなく愛は奪ふ』、山路愛山歿、澤田正二郎新國劇を創始。ロシアに三月革命、十一月革命起る、レーニン政權掌握。

私は大正五年四月中學の五年生になつて、齡は算へ十八、滿で十六歳だつた。大正三年あたりから、朝日新聞で夏目漱石の「こゝろ」、「道草」と讀み、五年には「明暗」にとりついた。他の作家のも手當

り次第讀んだ。漱石が一番らしい、と見當をつけたが、徳田秋聲の新聞連載ものを讀んだときは、これこそ本當の大人の小説なんだらうな、と思つた。その連載ものの一部、といふより一回分の中の、ほんの二、三行の文章がいまだに頭に残つてゐる。自分などには全く手の届かぬ大人の世界が、その二、三行の中に躍動してゐると思つた。それが、秋聲のどの作品だつたのか、實は未だつきとめて居ないのである。恐らくは、「かづ徴」「あらくれ」のどつちかだらうと思ふが、それをつきとめるのも、「片づけごと」の一つである。「かづ徴」だとすると、私が小學校六年生時分のことになる。そんな子供が秋聲の作品を讀むとは可笑しいと思はれるか知らぬが、新聞雜誌を讀み散らす點だけでは相當のトツチャン小僧だつたらしい。自家には、父や母が讀み古した明治時代の雜誌が澤山あつた。それらを、判つても判らなくとも讀み散らしてゐたのだ。

○

中學五年の夏休み中、つまり大正五年八月の某日、近所の友人の家の土藏をかき廻して借りて歸つた『中央公論』の古雜誌（大正元年九月號）で志賀直哉の「大津順吉」を讀んだことが私の生涯を決めてしまつた——そのことは幾度となく書いてりしやべつたりしてゐるから、これ以上觸れない。

漱石も秋聲もいいが、「大津順吉」の主人公の青年であることが私を惹きつけたわけだ。どこの誰かまるで知らない初見の志賀直哉。「大津順吉」は、世に言ふ（のちにさう極印を打たれた）「私小説」に違ひないが、作者の何者たるかを全く知らぬ一讀者にあれほどの感銘を與へたのはどうしたわけか。いつたい「私小説」とは何か。

「私小説」（ならびに所謂「心境小説」をも）まるでインドのアンタッチャブル階級視する世の批評家